

『かわうその話』

昔は、楽しみが少なかった。冬になると、子どもたちは、いろりを囲んで、祖父母の「昔語り」を聞きながら夜を過ごすことを、楽しみの一つとしていた。祖父が私たちに語ってくれた「昔語り」は、たくさんあるが、その中の話を一つ紹介する。



祖父が、城山の裏手にあたる山を開墾していた頃の話である。

ある日、祖父は、所用のために、金沢に行くことになり、朝三時頃に起きて、山小屋をでた。月は、皓々（こうこう）として、真昼のように輝き、空には、雲一つない暁（あかつき）だった。祖父は、山を下りて、道が大谷川沿いにさしかかった頃、あたりは、怪しい雰囲気になってきた。

よく見ると、二間ほど前を、赤いちゃんちゃんこを着て、丈（たけ）なら二尺ほどの小坊主が歩いていた。祖父が止まると、その小坊主も止まり、後ろを振り返って、祖父を見ていた。祖父が早足に歩くと、小坊主も早足となり、祖父がゆっくり歩けば、小坊主もゆっくり歩いた。いつでも、同じ間隔をあけて、小坊主は、祖父の前を歩いていた。

二の谷を過ぎた頃から、祖父は、小坊主の様子がおかしいと思い始めた。そして、「あれは、小坊主ではない。むじなか、かわうそに違いない。」と思った。

そこで、祖父は、道のそばにあった石に、腰をおろし、たばこを出して、火をつけた。その途端、「パシャー。」と大きな音をたてて、その小坊主は、大谷川へ飛び込んで消えてしまった。

そのあとは、何事もなく、祖父は、山を下りて、無事に金沢へ行って、所用を済ませてきたそうである。

そして、祖父は、この話をした後で、「けものが、一番恐ろしがるのは、火である。だから、たばこに火をつけたのだ。」と話してくれた。

(千野町 高塚 静子)